

[講演要旨] 元禄地震(1703)における江戸での震災対応

大谷大学大学院 文学研究科 西山昭仁

§ 1. はじめに

元禄地震(元禄南関東地震)は、元禄十六年十一月二十三日(グレゴリオ暦:1703年12月31日)の丑刻(午前1~3時頃)に発生して、南関東一円に多大な被害を与えた海溝型の巨大地震である。被害は、江戸・鎌倉・小田原・箱根などで大きく、特に小田原での被害は甚大で、小田原城が大破し、城下町の建物は火災・倒壊が夥しく、直後の出火によって壊滅状態となった。また、地震直後に発生した津波によって、相模湾沿岸や房総半島の太平洋沿岸、伊豆半島東岸などが甚大な被害を受けた。

江戸では、江戸城の石垣・塀や櫓・門に至る所で被害を受けており、市中では江戸城の北東~南東区域での被害が大きかった。これに加えて江戸市中では、地震発生から6日後の十一月二十九日の暮六つ時過(午後5~6時頃)に大火が発生しており、地震で被災した江戸の市街地はこの大火で更なる被害を蒙った。

本報告では、元禄地震における江戸での震災に際して、幕府や町人がどのような対応を実施したのか、また、江戸での震災対応にはどのような特徴が見られたのかについて、検討を加えていく。

§ 2. 幕府の対応

江戸城での対応 当時、江戸幕府の政治中枢であった江戸城は、未明に発生した地震によって、多くの櫓や門、石垣・塀などが大きな被害を蒙っており、被災した城内は混乱状態にあった。地震直後の将軍への御機嫌伺い(安否の確認と敬意の表明を目的とする行為)については、尾張・紀伊・水戸の御三家の使者以外は江戸城への登城が制限されており、他の諸大名・旗本などは、老中小笠原長重の邸宅へ赴いて御機嫌伺いを行った。

また、江戸城が大きく被災したために、幕府は地震直後から江戸城の防備に専念しており、修復工事の速やかなる遂行を最優先課題とした。

諸大名・旗本への対応 幕府は、小田原城とその城下町が甚大な被害を受けた小田原藩主の大久保忠増に対して、帰国の暇を与えており、金15,000両を貸与した。

他方で、先年の幕府からの拝借金に関して、幕府は返納の延期を許可しており、今年返済した分については諸大名・旗本へ返却された。

江戸市中への対応 江戸の町方支配を担っていた町奉行は、地震後の江戸市中に対して、火災発生への警戒強化や虚説の取り締まり、諸物価・賃金の値上げ禁止など、様々な対応を講じた。特に、十一

月~二月の江戸は大火の発生しやすい時期であり、地震直後の江戸市中には、大破・倒壊した建造物の殆どが、手付かずの状態で見捨てられていたことから、火災発生への危険性は高まっていた。そのため、地震発生以後、火災発生への警戒は更に強化され、火の元注意が江戸市中に命じられた。しかし、そのような町奉行の地震直後の取り組みは功を奏することなく、地震発生から6日後の十一月二十九日の夕刻には、大火が発生する結果となった。

§ 3. 町人の対応

避難の状況 地震直後、多くの町人は、地震によって生じた被害や、その後の相次ぐ余震によって生じ得る更なる家屋の損壊を危惧した。江戸市中の神田明神の東門付近(神田明神下同期町など)では、多くの人々が道路上へ避難しており、路上は混雑した。

幕府の施策を受けての対応 地震発生から6日後の十一月二十九日、江戸市中の各町内では町奉行の指示で、倒壊した家屋・土蔵の数が調査された。しかし、同日の夕刻には、江戸市中で大火が発生し、地震によって倒壊した建物が類焼した場合も多くあったことから、それ以後の被害調査は困難を極めたように思える。

一方、地震と大火によって困窮した江戸市中の町々に対して、当年の「犬扶持」が免除されており、先に上納した半年分の「犬扶持」の銀子も返却された。そのため、その銀子が町々において、当面の復旧費用に充当されたことは想像に難くない。

§ 4. 震災対応の特徴

元禄地震における江戸市中での被災の特徴としては、地震の揺れそのものによる被害(震害)も多大であったが、その6日後に発生した大火による被害の方がより甚大であり、地震による被害が大火の発生によって拡大されたと言えよう。そのため、江戸市中では大火の発生以降、震災への対応よりもむしろ、延焼被害や更なる大火発生への警戒の方が重視される事態となった。元禄地震時の江戸での震災対応は、時間の経過と共に、大火への対応を主とした複合的な対応へ変化していったと考える。

※本講演要旨は、「元禄地震(一七〇三)における江戸での震災対応」(2003年、大谷大学大学院研究紀要第20号、p221-253)として既に発表した論文の要約である。